



## Mercedes-Benz 280SE

Sクラスのゆとりが  
オーナーを包みこむ

### 縦目+堅牢なボディという最高のコンビネーション

いつの時代にもメルセデス・ベンツは時代の要求を色濃く反映したクルマ造りを実践してきた。1950年代には使い勝手の良さが求められ、続く1960年代には高い実用性をベースとして、スタイルの良さ、豪華さ、快適性等が求められた。

そのような時流の中でメルセデス・ベンツは最善のクルマを開発し、いわゆる“縦目”のヘッドライトを持つモデルが最盛期を迎えた。上級クラスのサルーンだけにスポットライトを当てて簡単に説明すると、1950年代に親しまれた220シリーズ(テール・フィンを持つモデルも存在)が1965年に250S/250SE等へと進化し、その後、コンパクト・クラスの登場に伴ない排気量を拡大し、1968年1月に280S/280SE/280SELとなった。

Sはツインキャブ仕様、SEは電子制御燃料噴射仕様、Lはロング・ホイールベース仕様といった内訳で、ユーザーは使用目的や予算に合わせ、好みのモデルをチョイスできた。なお、2.8リッター・ユニットの登場により、旧250ボディに4ベアリングの3リッター・エンジンを搭載した300SEがカタログ落ちし、ロング・ホイールベース版の300SELだけが残された。

しかし、300SELもパワー・ユニットとして280シリーズと同じ2.8リッター・エンジンを採用し、280SELとの相違点はエアサスペンション、AT、パワーステアリングを標準装備する程度だった。

その後もSクラスの前身となった280/300シリーズは、エンジンの仕様を変えるなどしてバリエーションを矢継ぎ早に増やしていったが、

1972年にフルモデルチェンジされ、初代Sクラスにバトンタッチした。

ちなみに、1968年～1972年までの間にラインナップされたサルーンの280/300シリーズと同じ時代を過ごしたメルセデス・ベンツを見渡してみると、クーペ、カブリオレ、そして、SLなどが存在していたことに気付く。いずれもスタイリッシュなモデルなので根強いファンを獲得しているが、特にSLに関しては今でもその人気の高さが別格だといえる。

往時もSLのようなロードスター(ハードトップを装着すれば耐候性が高いクーペとして活用できた)ばかりがスポットライトを浴びていたと思われるが、名車を探すという観点から1968年～1972年までの間に生産されたメルセデス・ベンツを振り返ってみると、やはり、サルーンの280/300シリーズが最も名車と呼ぶに相応しい資質を備えているといえる。



W108型の280シリーズは、デビュー当初、排気量2778ccの直列6気筒SOHCエンジンを搭載していたが、1970年に排気量3499ccのV型8気筒エンジンを搭載する280SE 3.5/280SEL 3.5を追加設定した。翌年には4.5リッター・V8仕様も登場した。



現車は1972年式のメルセデス・ベンツ 280SEで、内外装レストア済みという良質車。NEWペイント、NEWカーペット、NEW MBテックシート(ブラック)というスペックで、ヘッドレストが無いローバック・スタイルのシートがインテリアの特徴になっている。外装色はマスタード。エンジン・ルーム内にも手が入っており、ヒストリックカー・ビギナーにもお勧めできるだろう。ちなみに、国内未登録車のため、新規登録にて車検3年付となる。撮影協力: Evita <http://www.evita-mj.com/>

というのも、オーソドックスなサルーンであるが故にセールス面で中心的な役割を果たしたといえ、このクルマがモデル・バリエーションの根幹として存在していたからこそ、クーペ、カブリオレ、そして、SLが趣味性を追求することができたからである。

自動車趣味生活のパートナーとしてサルーンをチョイスすることにこの足を踏んでしまう方がいるかもしれないが、売れ筋となるサルーンの中にこそメーカーの哲学が色濃く反映されていると考え、徹底的に使い倒してみても面白いと思う。

筆者はW210型Eクラスを仕事の足として愛用しているが、今回の取材時に「このぐらいのサイズで、Sクラスの上級さを堪能できるのは素敵なこと」だと心底思ってしまった。

現代のスポーツカーと往年のサルーンで楽しむ自動車趣味生活というのも、組み合わせとして悪くないだろう。